

2021年度

愛知の音楽教育

(第53集)

もくじ

I はじめに	2
II 教育課程編成にあたっての基本的な考え	3
III 授業実践	5
「仲間とわかり合い、イメージに合った表現を工夫しようとする生徒の育成」	
— 3年 和楽器（箏）を使ったグループによる創作活動を通して —	
豊田市立逢妻中学校 中島 明子	
1 はじめに	
2 研究内容	
3 指導構想	
4 研究の実際（結果と考察）	
5 成果と今後の課題	
6 おわりに	
IV 第71次教育研究愛知県集会のまとめ	10

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会音楽部会

2021年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
○前田 麻紀	名古屋	鳴海東部小	長瀬 麻美	稲沢	祖父江中	◎井上 裕弓	豊川	国府小
○福田 純也	名古屋	守山中	寺澤 真智子	知教連	阿久比中	土屋 董	西尾	吉良中

第67次～70次教育研究全国集会レポート提出者

67次			68次			69次			70次
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	—
辻 真理子	蒲郡	蒲郡北部小	後山 あかね	名古屋	丸の内中	中島 明子	豊田	逢妻中	—

第71次教育研究全国集会レポート提出者 澤下 了輔（愛知・（長久手）東小）

I はじめに

いじめ、不登校、増え続ける子どもたちの問題行動など、教育現場における課題は山積している。それに加え、本年度もコロナ禍は続き、新しい生活様式による制約を続けていくなど、特に音楽科の授業においては、さまざまな配慮を求められている。歌唱や器楽演奏などが制限される中、「何ができるのか」を考え、さまざまな対策を講じながらの授業実践となった。

これらのさまざまな困難の中、小学校において全面実施となった新学習指導要領。新しい生活

様式での制限のもと、新学習指導要領においてわたくしたちが目指す「ゆたかな学び」とは何か、その実現に向けてわたくしたち音楽教員ができることは何か、音楽という教科だからこそできることは何かを念頭に置きながら、日々の実践を積み重ねている。

美しい音楽を聴いて感動する豊かな心を育み、音楽表現を通して仲間とかかわり合う喜びを味わわせることができる音楽教育。そこには、多くの可能性があるといっても過言ではないだろう。今一度、音楽教育の重要性と可能性を再認識し、目の前の子どもたちに向き合っていくことが大切だと考える。

愛知の教育は、これまで「人づくりと音楽」を柱にして実践を積み重ねてきた。これは、表現は一人ひとりの心の現れであり、よりよい表現を求めることは、感性を育み、豊かな情操を養うことにつながるという考えがもととなっている。第71次教育研究愛知県集会は初めてのWEB開催となったが、そこに集められたレポートは14本。これらは、第70次までに積み上げられた課題にもとづいて、本年度のコロナ禍での試行錯誤を行いながら作られたものである。音楽の授業を通してどんな子どもを育てるのか、めざす子どもを育むために身に付けさせるべき力とは何か、めざす子どもを育てるための基礎・基本の指導方法や教材選択のあり方についての手だてや工夫が多数報告され、WEB開催の中においても活発な議論が行われた。

今回の授業実践として示すものは、一昨年度、全国大会にて報告されたレポートであり、実践者が、目の前の子どもたちに真摯に向き合った成果である。これらが、愛知の子どもたちのゆたかな学びにつながる、愛知の音楽教育の一助となれば幸いである。

II 教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

音楽科では、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養うことがねらいである。

そこで、以下の点について重点的に指導したい。

① 歌唱・器楽の活動

- ・ 音楽を聴いたり楽譜を見たりして演奏することや、歌詞の内容や曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。
- ・ 呼吸及び発声の仕方を工夫して自然で無理のない響きのある歌い方で歌ったり、楽器の特徴をいかして楽器演奏をしたりすること。
- ・ 各声部の役割や全体の響きを感じ取り、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。

② 音楽づくり・創作の活動

- ・ 構成する過程を大切にしながら、音楽のしくみをいかし、さまざまな発想をもって即興的に表現したり、見通しをもって音楽を作ったりすること。
- ・ 表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取り、反復・変化・対照などの構成を工夫しながら、簡単な旋律や音楽をつくること。

③ 鑑賞の活動

- ・ 曲想やその変化などの特徴を感じ取って聴くこと。音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解して聴くこと。
- ・ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。

④ 共通事項について

- ・ 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。
- ・ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。

○「生きてはたらく力」

世の中にある膨大な情報量の中から、自分の気に入った音楽を選んで、存分に関わる力は、人生をより豊かにしていくためにも必要である。その中でも、合唱・合奏は他者のがんばりを尊重したり、足りない部分は補いあったりしながら、自分ひとりでは決して成し得ない音楽をつくりあげることで、社会での多様性や生き方を学ぶことができる。

また、社会の急速な変化により、人間関係が希薄になりつつある社会の中で、子どもたちが音楽を通じたコミュニケーションを通じ、例えば音楽づくりの過程でどんなことを学び、経験し、時には試行錯誤しながらもその中で何かを発見し、音楽を作り上げながら逞しく成長していくことは、生きてはたらく力を身につけるために有効だと考える。

実践例 「がっきのおとをたのしもう」(小学校1年)

◇ ねらい

打楽器の音色をいかした音遊びを通して音楽づくりの発想を得たり、様子を表す音楽の楽しさを見出しながら曲全体を味わって聴いたりする。

◇ 実践例における「ゆたかな学び」のポイント

- さまざまな音の特徴に気付くための打楽器を活用した音遊び…〈手だて1〉
いろいろな音を聴いて体を動かしたり、一つの打楽器でさまざまな音を出したりしながら遊ばせる。また、いろいろな楽器の音を聴き比べて、それぞれの音の特徴に気付かせる。
- 曲想と時計の音とのかかわりに気付くための身体表現…〈手だて2〉
2種類の打楽器の音を聴きとったり、体を動かして聴いたりしながら、曲の感じがどのように変わったかを考えさせ、気付いたことを発表させる。
- 表したい時計の音についての考えを出し合うためのグループ活動…〈手だて3〉
絵や写真、歌等に触れて時計の様子を思い浮かべながら、どんな音になるか考えさせる。さらに即興的な表現や音楽づくりにつなげるために、2～3人のグループで楽器の音を組み合わせ、重ねたりつなげたりしながら、表したい時計の音楽を作らせ、発表させる。

◇ 実践の概要

1 音楽づくり（音遊び） (1時)

- 打楽器に合わせて体を動かしたりしながら聴き比べたり、「打つ」「擦る」「振る」など楽器の鳴らし方を工夫させたりして、気付いたことをワークシートに記入させた。

2 鑑賞「シンコペーテッド・クロック」 (2～3時)

- ウッドブロックやトランアングルの音を聴きとったり、そのリズムに合わせて身体表現をしたりしながら鑑賞し、どのように楽器を鳴らしているのかを考えさせた。
- 《はじめ》《なか》《おわり》で時計の様子がどのように変わるかを想像しながら聴かせワークシートに記入させた。曲の楽しいところや変化したところを発表させた。

3 音楽づくり（音遊び） (4～5時)

- 絵本や写真、歌等で時計の様子を思い浮かべながら、どんな音が聴こえるかを話し合ったり、声や音で即興的に表現させたりして、音楽づくりの発想へとつなげた。
- グループで打楽器の音を組み合わせ、重ねたりつなげたりして、表したい時計の音楽をつくらせた。つくった音楽は発表し合い、友だちのよい点を伝え合う場を設けた。

◇ 実践のまとめ

- 成果
一つの楽器でさまざまな音の鳴らし方を工夫したり、さまざまな楽器の特徴の違いを聴き取ったりしながら身体表現する子どもの姿がみられた。また、鑑賞後に、友だちと楽器の特徴や時計の音を表す音の出し方を相談しながら、即興的な音楽づくりをする子どもの姿がみられた。
- 課題
打楽器の音を組み合わせ、重ねたりつなげたりしながら、表したい時計の音楽を作る場面で、自分の打ちたい楽器のリズムはあっても、それを時計の音楽にうまく結びつけられない子どもの姿がみられた。

Ⅲ 授業実践

仲間とかかわり合い、イメージに合った表現を工夫しようとする生徒の育成

— 3年 和楽器（箏）を使ったグループによる創作活動を通して —

豊田市立逢妻中学校

中島 明子

1 はじめに

箏は我が国の伝統楽器であり、音符のない数字のみの楽譜を使用するため、音楽経験の差に関係なく、全員が同じスタートで取り組むことのできる題材である。

本校では、3年間で段階的に箏の学習に取り組んでいる。1年時は、箏の基本奏法を習得し、2年時は、一人ひとりが自分のイメージした桜に合わせて、「さくらさくら」の簡単な前奏づくりを行った。しかし、個人の創作活動では、表現力に個人差があり、全員がイメージを音楽につなげて表現を工夫できたという感覚を味わうまでには至らなかった。そのため、3年時では、グループによる創作活動を取り入れ、仲間と意見を出し合い、練り合うことで、よりよい音楽づくりにつなげることができるのではないかと考えた。

そこで、仲間とかかわり合い、試行錯誤して音楽表現を工夫する主体的・対話的な学びを通して、仲間とともに演奏する楽しさを味わうことのできる生徒になってほしいと願い、本研究主題を設定した。

2 研究内容

(1) めざす生徒像

- ① 箏の響きや奏法をいかし、自分なりに膨らませたイメージをもって表現しようとする
ことのできる生徒
- ② 仲間とかかわり合いながら、音楽表現を工夫し、音楽の楽しさを味わうことのできる
生徒

(2) 仮説と手だて

【仮説1】 表現したいことを視覚化・言語化することで、イメージと音楽的工夫を結びつけることができるであろう。

手だて① 「情景写真」提示による即興演奏

イメージしたことを音楽で自由に表現するために、ウォーミングアップとして、いくつかの違った風景写真を見て、即興的に箏で表現し、発表し合う活動を取り入れる。

手だて② グループによる「情景写真」選びと曲名考案

「オリジナルのさくら」を表現したいという意欲を高めるために、グループでお気に入りの春の情景写真を選び、イメージに合わせた曲名を考えさせる。



手だて③ 「音楽表現を工夫するための方法」の提示

イメージしたことを音楽的工夫へつなげるために、〈速度の変化〉〈リズムの変化〉〈音色の変化〉〈強弱の変化〉〈音の重なりによる面白さ〉などの音楽的要素の具体例を提示する。

【仮説2】 生徒どうしがかかわる場を設定することで、主体的・対話的な学びにつなげることができるであろう。

手だて④ グループ活動の工夫

限られた楽器の数や少ない時間の中で、より主体的なグループ活動を行えるようにするために、演奏上の役割分担を示したり、相談タイムと練習タイムという時間を設定したりする。

手だて⑤ 発表し合う場の設定

発表会を通して、グループで協力し、仲間とともに演奏をつくり上げたり、表現したりする楽しさを味わわせる。また、互いに聴きあう場を与えることで、さまざまな表現方法があることに気付かせる。

(3) 抽出生徒について

	生徒の実態	めざす生徒像
A	ピアノや吹奏楽部経験者であり、音楽に関する知識は豊富である。歌唱テストにおいても、音程、響き、表情ともに高い評価を得るなど、自分が一生懸命取り組むことで自身の技能アップをめざすことができる。しかし、自分に自信がなく、合唱祭の練習では「もっとこうしたい」という思いをもちながらも、仲間に積極的に伝えて改善していこうとすることができなかった。	自分のアイデアをきちんと周りに伝えることで、仲間のアイデアを引き出させたい。また、仲間とともに音楽づくりを行うことで、自分だけでは思いつかない表現方法や音の重なり面の面白さに気付き、仲間と意見を伝え合うことのよさに気付かせたい。
B	集中力が長く続かず、学習意欲は低い。合唱祭の練習では、やる気になってからの伸びはよかったが、スイッチが入るまでに時間がかかった。鑑賞の授業では、感じたことを文章にするのは苦手だが、音楽に合わせて体を動かしたり、感じたことを臆せず発表したりすることができ、発想力の高さを感じる。	発想力の豊かさをいかして、積極的にアイデアを出し、グループ活動にすすんで参加する姿を期待したい。そして、仲間とともに、音楽づくりをする楽しさを味わわせたい。

3 指導構想 全4時間

時	活動内容	主な学習活動
1	○1, 2年時の復習 ○新しい奏法の学習	・「さくらさくら」の主旋律のペア練習。 ・前奏、後奏を使って流し爪、かき爪、合わせ爪、後押しを学習し、次時につなげる。
2	○イメージした情景を音楽で表現するためのウォーミングアップ ○グループでの話し合い活動	・イメージしたことを音楽で表すことに慣れるためのウォーミングアップをする。(・激しく流れる滝 ・おだやかに波が寄せて返す様子などを即興的に箏で表現し、発表し合う。) ・春の情景写真をもとにグループごとにオリジナルの曲名を考え、イメージに合った箏での表現を話し合う。 ・演奏上の役割分担を決める。
3	○グループ練習	・イメージに合った「さくらさくら」にするために、グループで表現の工夫を話し合い、練習を進める。
4	○グループ練習 ○発表し合い、聴きあう	・アンサンブルの発表をする。 ・互いの演奏を聴きあい、よさを味わう。

4 研究の実際（結果と考察）

（1）イメージした情景を表現しよう <仮説 1> 手だて①

基本の親指奏法と押し手や流し爪、かき爪、合わせ爪、後押しなどの奏法を練習後、イメージしたことを音楽で自由に表現するためのウォーミングアップを行った。はじめに、「滝が激しく流れる情景写真」を提示し、「この情景を箏で自由に表現してみよう」と投げかけた。自分なりのイメージをすぐに音にできる生徒もいれば、Aのように考え込んでしまう生徒もいた。そこで、流し爪やかき爪などの奏法を使って、表現を工夫している生徒を意図的に指名し、発表させることで、人によって使う音の高さや速度に違いがあることに着目させた。次に、「おだやかな海」「カモメが飛び交う海」などの情景写真を使って、即興演奏を繰り返した。

A は周りの仲間のいろいろな表現を聴くことで、徐々にイメージを自分なりの音で表現できるようになってきた。即興演奏後に書いた A の授業感想には、表現についての理解や表現することへの意識の高まりが感じられる記述がみられた。イメージしたことを即興演奏する活動を行ったことで、A はいろいろな表現方法に気付き、今後のグループアンサンブルに意欲をもつことができたと言える。

【A の感想】

表現は、深く考え込まず、インスピレーションを大事にすればよいことが、分かった。他の人のアイデアを聞いて、いろいろな表現があって面白いと思った。グループでのアンサンブルもがんばりたい。

また、第 1 時の基本の「さくらさくら」の演奏では、ついていけず途中で諦めてしまっていた B だが、感覚的に表現できる即興演奏に興味を示し、意欲的に取り組む姿がみられた。

（2）自分たちの表現したい「情景」を選び、イメージに合った曲名を考えよう <仮説 1> 手だて②

情景写真を使ったウォーミングアップ後、グループごとに、いくつかの「春の情景写真」の中から、自分たちが表現したいものを一つ選び、それにあった曲名を考える活動を行った。どのグループもお気に入りの写真を選び、イメージを伝え合いながら、曲名と表現したい内容を考えることができた。【資料 1】



B のグループが選んだ情景

B のグループの話し合いの様子は以下【資料 2】の通りである。

【資料 1】

（各グループの曲名と表現したい内容）

- 『E n d オブ すぷりんぐ！！』
・富士山と終わりかけの桜を表現（A のグループ）
- 『もう一つの世界』
・桜の景色が川に映っている情景を表現（B のグループ）
- 『夜桜～隅田川を添えて』
・お祭りの日にぎやかな桜を表現
- 『しだれ桜の夜』
・夜の静かなキレイな感じを表現
- 『夜桜～君を思ふ』
・夜の桜まつりの思い出を表現
- 『ダークナイト』
・夜の落ち着いた桜を表現

【資料 2】

- B 桜と鳥の写真がやりやすそうじゃない？
鳥の鳴き声とか入れればいい感じだし。
- C 川に映っているのもすごくきれいだよ。
班員 いいね、いいね。それにしよう。
- B はい、もう曲名、思いついたよ。「もう一つの世界」かっこよくない？
- D いいじゃんそれ！！
- 教員 川に映っているのが「もう一つの世界」ということだね。それはどんなイメージ？
- E 暗い感じ。
- B 闇だね。
- 教員 では、この暗い闇を箏でどんな工夫をして表現していくかを考えていってね。

グループ全員が同じ写真を見ながら、話し合いをすすめることで、イメージが共有化され、自分たちだけのオリジナルの曲を表現したいという思いを高めることができた。B のグループでは、その後、具体的な工夫についての話し合いがすすんだ。【資料 3】このように、情景写真を使い、イメージしたことを曲名や曲想に結びつける活動を行ったことで、生徒たちは具体的な表現方法を考えることができた。

【資料 3】 を書いていこう。【 ~ を表現するために ~ を~のようにした。】

↓

●速度（速い、遅い、だんだん～） ●音色（力強く、柔らかく、ピツィカート奏法や弾く位置など） ●合いの手・飾り

川に咲いた桜を表現するために <リカえしやあかり、高い、低い、ふせの差

（3）「音楽表現を工夫する方法」について考えよう <仮説 1> 手だて③

第 3 時では、まず自分たちが表現したいイメージを、どのように音に結びつけるかの方向付けをするために、「音楽表現を工夫する方法」をホワイトボードに提示した。【資料 4】これにより、各グループの話し合いでは、「落ち着いた雰囲気を出すために、少しテンポを遅くしよう」「柔らかく、ふんわりした雰囲気を出すために、ピツィカート奏法を使ってみよう」など、話し合いの中に音楽的要素を含んだ意見交換が行われるようになった。

【資料 4】

音楽表現を工夫するための方法！

- ・テンポ（速度）の変化 速い、遅い、だんだん～
- ・リズムの変化 七 七 八 ○（タンタンターン）
七 七 七 八 ○（タンタタターン）
- ・音色の変化 弾く位置、ピツィカート奏法、トレモロ奏法
- ・強弱の変化 強い、弱い、だんだん～
- ・音の重なりによる面白さ 合わせ爪、かき爪、飾り、伴奏、副旋律、ハモリなど

B は、ホワイトボードに工夫する視点が具体的に示されると、その中の「音の重なりによる面白さ」に着目し、ピツィカート奏法、トレモロ奏法、合わせ爪など、示した奏法のほとんどを使って、水面に映るもう一つの世界を表現しようと意欲的に取り組む姿がみられた。

（4）主体的にグループ練習に取り組もう

・演奏上の役割分担や練習パターン（相談タイム・練習タイム）の設定 <仮説 2> 手だて④

グループアンサンブルをする上で、すべてがフリーの状態では、限られた練習時間の中で、アンサンブルとしてまとめ上げることは難しい。そこで、生徒たちに演奏上の役割分担を与えることにした。【資料 5】

【資料 5】

役割分担

- ①前奏担当（前奏＋その他）
- ②基本のさくら担当（アレンジ可）2人
- ③飾り担当（合いの手や装飾音）
- ④ハモリ担当（伴奏や対旋律など）
- ⑤後奏担当（後奏＋その他）

その上で、一人ひとりが自分に与えられた役割の中で、グループで共有したイメージにつなげるための表現方法を自分なりに考え、それを互いに披露し、感想を伝え合い、練り合うための場を設定した。【資料 6】

A の役割は、「ハモリ担当」であった。最初の相談タイムでは、まだ自分なりのアイデアがまとまっていなかったため、自信をもって仲間に披露することができ

【資料 6】

○相談タイムと練習タイム
(5分×交互に2回ずつ)

<相談タイム>

- ・グループで1面の筆を使って、自分の考えたアイデアを伝え合い、互いに練り合う時間。

<練習タイム>

- ・一人1面を使って、自分の役割部分を練習したり、皆で合わせて音の重ね方を工夫したりする時間。

ず、仲間のアイデアを聞くのみになってしまった。しかし、グループのメンバーの「散っていく桜を表現するなら、初めは満開のさくらを表現して、最後の後奏で散る感じを表わそう。」という意見を参考に、次の練習タイムの中では、自分なりの表現を考えることができた。そして、2回目の相談タイムでは、「基本のさくら担当の子の動きに合わせて、オクターブ上や下の音を使って、満開の桜を表現したい」という思いと実際の表現方法を仲間に伝えることができた。さらに、楽譜にも追記したことで、2回目の練習タイムでは、合わせを中心とした練習を行うことができた。【資料7】

相談タイムと練習タイムを交互に設定し、仲間とかかわる時間を意図的に作ったことで、生徒たちは仲間の意見を参考にしながら、主体的に練習に取り組むことができた。

【資料7】

	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
	十五	七為	十五	七為	五十	七為	七為	前奏
	斗大	七為	九四	中八	四九	八中	七為	★アンサンブル練習の感想(演奏前)
	中ハ 七為 斗大	八中	十五	中九	五十	九中	八中	
	十五	七為	斗大	中ハ	六斗	八中	七為	
		七為	十五	七為	五十	七為	七為	
			五四 九八	中ハ 七為 斗大	五九 四八 三	八中 七為 六斗	八中	

習の成果の発表です。グループリーダーは演奏前に表現の工夫を伝えてください。

End オブ すみりんぐ!」です。(散、てい)桜を表現するために()を工夫しました。

最初は1オクターブ上のコードを入ることで満開の明るい雰囲気を出し、後奏で散っていく悲しい感じを出した。

7の発表を聴いての感想(工夫点、表現したいことの伝わり度など良かった点)

(5) 互いに発表し合い、聴きあおう <仮説2> 手だて⑤

第4時の発表会では、聴き手に伝えるだけでなく、演奏する側がこれまでに練り上げてきた表現を再確認し、気持ちを込めた演奏につなげるために、リーダーが曲名と工夫した点を伝えてから、演奏することにした。

Aのグループの発表では、Aはリーダーとして、自信をもって表現の工夫を伝え、堂々と演奏を披露することができた。演奏後のAの感想には、グループで案を出し合いながら活動でき、協力できて楽しかったという記述がみられた。また、他のグループの発表を聴いての感想の中にも、イメージと音楽表現をつなげて聴くことができたこと分かる記述や多様な表現方法があり、それぞれによさがあることへの気付きなどが書かれていた。

【Aの感想】

★アンサンブル練習、発表を通しての感想!!(自分が頑張ったこと、工夫したこと、難しかったこと、学んだことなど)

練習では、10分間の練習が少し短く感じましたが、本番前はみんなと決めた。合わせの練習は少しおぼろげなけれど、本番は練習より30%くらい良かった。

前奏、後奏に困っていた時に、皆が案を出し合い、少し悲しい感じにしてみました。1オクターブ上、1オクターブ下を行き来してリズムがよくなりました。1オクターブの音を重ねることで満開の明るい雰囲気を出せたと思います。もう少しおぼろげな感じを合わせて演奏したら、もっと練習が楽しくなるかなと思いました。難しかったけれど、練習で楽しかったです。

【Aが書いた他のグループの発表に対しての感想】

班	C	優いよど流れるように弾く音が、ピアノ特有の雰囲気を出している良い発表。
Bの班⇒		合の手がすれはまらぬまま、水面にウツリのように、喜び、同様の“ぬ”者を通江弾いて良かった。

Bのグループの発表では、ともに演奏する仲間の音を聴きながら、タイミングを合わせて自分の音を奏でようとするBの姿がみられた。演奏後のBの感想には、皆でなかよく活動できたことに加え、本番、予定していたはずのトレモロ奏法ができなかったことへの後悔が記述されていた。このことから、Bが箏のグループ発表にむけて、主体的に取り組んでいたことが分かった。

【Bの感想】

できあがりかあったのでうかいたと思います
おんなやなごうでよかったをまっています。
トレモロもすていでしたタイミングがわからずできあがりです。

5 成果と今後の課題

(1) 仮説1について

情景写真の提示は、「イメージをもち、表現したい」という思いをもたせるのに効果的であった。また、自分たちで曲名を考え、表現したいことを言葉にすることで、イメージをより具体化することができた。そして、音楽表現の方法を提示することにより、「落ち着いた雰囲気を出すために、少しテンポを遅くしよう」「柔らかく、ふんわりした雰囲気を出すために、ピツィカート奏法を使ってみよう」など、話し合いの中に音楽的要素を含んだ意見交換が行われるようになり、実際の演奏にもいかすことができた。これらの手だてによって、生徒たちはイメージと音楽的要素を結びつけることができたのではないかと考える。

(2) 仮説2について

演奏の役割分担をしたことで、一人ひとりが人任せにせず、自分の役割を果たしてグループに貢献したいという思いをもって取り組むことができた。また、限られた時間の中ではあったが、グループでの相談タイム、練習タイムを設定したことで、互いに意見を出し合い、表現の工夫を考えることができた。まとめの授業感想には、仲間とともに楽しく活動できたことや、他のグループの表現の工夫から学んだことなどについて書かれていた。これらの手だてにより生徒たちは仲間とかかわることで、主体的・対話的な活動をすることができたと考える。

(3) 今後の課題

発表会を終えて、どのグループも自分たちだけのオリジナル「さくらアンサンブル」を完成させることができ、生徒たち自身、満足感を得ることができたように思う。しかし、教員の目から見ると、全体的にこじんまりした表現になってしまったようにも感じた。音楽表現の方法の例を提示したことが、かえって生徒たちの表現の幅を狭めてしまったということも考えられる。今後は、さらに、子どもたち独自の発想力を引き出し、表現につなげる方法を模索していきたいと思う。また、今回は自分たちが工夫した表現を楽譜に残すことができず、弾くたびに違う、即興的な表現になってしまった生徒が多かった。今後は記譜の仕方なども説明し、表現したことが形としても残るようにしていきたい。

6 おわりに

今次研究では、9年間の見通しをもった学習活動や指導の工夫や他教科・領域、地域の特色と関連させた音楽教育のあり方について、さまざまな視点から多くのレポートが寄せられ、愛知県集会でも活発な討論が行われた。音楽の学びを支えているのは意欲であり、あこがれがもてるような教材や人との出会わせ方、「友だちと合わせて演奏できるようになった」と実感できることを重視して学びの充実を目指すことやICT機器や掲示物などでふり返りながら音楽を通して自分の成長を感じられるようにしていくことが大切であると確認された。

音楽科の学習で子どもが課題を乗り越え、達成感や充実感を味わうことは、子ども自身の自己肯定感を高めることにつながると考える。さらに、これを仲間とともに味わうことは、友だちを思いやる心や協調性を育むことにつながる。音楽のもつこのような「力」を学校生活にいかしていくことで、人とふれ合うことができる子ども、友だちとかかわり合うことができる子ども、互いを認め合い、高め合う子どもを育てていきたい。

IV 第 71 次教育研究愛知県集会のまとめ

1 全体の感想

本年度もコロナ禍が続き、音楽授業等においてもさまざまな配慮を求められる中、「何ができるのか」に重きを置き、仲間と主体的・対話的にかかわりあいながら表現の工夫をする実践やタブレット端末等の ICT 機器を活用した音楽づくりの実践が多く報告された。工夫をこらした手だてによって、子どもたちがかわり合い、変容していく様子がよくわかるものであった。子どもたちの実態を踏まえ、めざす子ども像を明確にし、わかる楽しさ、できる喜びなどの経験を積み重ねていけるよう、さまざまな工夫をしていくことが大切であると確認された。

討論では、「基礎・基本の定着を図り、子どもの学びを深めるための協働的な学習のあり方」「コロナ禍における音楽教育のあり方」をテーマに話し合われた。「音楽を形作っている要素」「言語活動とグループ活動」「郷土の音楽」「音楽づくり・創作」等、小学校・中学校と 9 年間を見据えて子どもたちに身につけさせたい力や、継続的に学びを積み上げられるように手だてを工夫する大切さについて話し合われた。さらに、タブレット端末などの ICT 機器を活用した授業の工夫についても話し合われた。最後に、音楽科はどのような時代であっても、人とのかわりの中での学びを深められる教科であり、心に寄り添える教科であることを共通認識した。

2 討論の内容

(1) 歌唱指導

作曲者の思いや意図を歌詞や楽譜から考えたり、身体表現を取り入れたりすることで表現の工夫につながる実践や、付箋を使ってグループで意見共有を行うなどの活動を通して、主体的に表現の工夫をする実践が報告された。また、グループ活動を活発化するために、まずは一人で考える時間を設けた後、少数グループで話し合うようにするなど、子どもたち一人ひとりが自分のこととして考えられるような手だての重要性が確認された。さらに、コロナ禍で歌う時間が十分に取れない中ではあるが、歌詞や楽譜を深く読み、背景を知ることによって表現も深くなるという助言をいただいた。

(2) 鑑賞指導

地元のお囃子を通して、地形と音楽の要素をつなげてグループで話し合いをすすめるなど、郷土芸能に愛着をもたせる実践や、音楽づくりと関連づけた鑑賞の実践が多く報告された。音楽を形づくっている要素のはたらきによる曲の特徴に気付かせるためには、聴くポイントを焦点化し、主体的に子どもに提示することの重要性が確認された。また、要素に着目させるためには、簡単な曲での音の高さ、速度、リズムの変化などの違いを聴かせることを継続して行うことで、理解を深めることができるとの助言をいただいた。

(3) リズム・創作活動・演奏活動

イメージする言語をリズムに置き換え、音楽づくりにつながる実践や、作譜アプリを利用して校歌の創作に取り組む実践などが報告された。段階的な学びや子どもどうしがかかわり合うことで学びを深める場を教師が仕組むことの重要性が確認された。また、ICT のよさとして作った曲を聴き合うだけでなく、言語活動を通して思いを伝えあったり、音声で確かめ試行錯誤を繰り返したりする学習過程が可能になったり、授業での活用の可能性を広げたりしていくことができるとの助言をいただいた。

3 今後に残された課題

- (1) 他教科・領域、地域の特色と関連させた音楽教育のあり方
- (2) ICT の活用と協働的な学習のあり方